

□海外文献紹介□

大腸癌患者での症状持続期間と
予後との関連

Relationship of symptom duration
and survival in patients with car-
cinoma of the colon and rectum:
Khubchandani M (Dis Colon Rec-
tum 28: 585-587, 1985)

一般に早期発見、早期治療は大腸
癌の予後を改善すると言われている
し、症状が出たばかりのときに診断
され、治療されれば、進行癌であ
っても予後はかなり良いと考えられて
いる。

この研究は194例の大腸癌で、術
前の症状の期間と腫瘍のステージお
よび生存との関連を検討することを
目的として行われた。

症状の持続期間により5つのグル
ープに分けた。①無症状 9.2%、②
症状発現3か月以内 38%、③3～6
か月 30.9%、④6～12か月 12.3%、

⑤12か月以上 9.2% で、21.5% の
患者が症状発現後6か月以上たつて
来診したことになる。症状は直腸出
血が67%と最も多く、次いでテネ
スモスの27.8%、便通異常の21.6
%、体重減少14.4%、腹痛が10.3%
であった。生存率をみるとグループ
①、つまり無症状群で最も良く、5
年生存率は66.6%を示した。他の
4つのグループでは、5年生存率は、
30～45%程度で、グループ間に有意
差を認めなかった。

この研究からは、大腸癌の患者で
は、一旦症状が出ると、その持続期
間と予後の間にはあまり関連がな
い。これは他の研究者の結論でも同
様である。McDermott らは、症状
発現3か月以内に来院した患者は、
より長い場合に比べて、予後が著し
く不良と報告している。ある腫瘍の
生物学的性格は、初めから決まっ
ているとする説がある。術前の症状期

間の短い患者の腫瘍は、長期間症状
があったと訴える患者のそれに比
べ、生物学的により悪性度が高いと
考えられる。更に、症状の持続期間
と腫瘍のステージとの間に特に関連
を認めなかったことは、他の研究と
同様でも、このことは、症状発現後
は腫瘍が増大しても、そのステージ
は進行しないことを示唆しているよ
うだ。

【コメント】 日ごろの経験で、急速
にイレウスを起こしてくるケース
は、症状の期間が短いものが多い。
結局は症状のないうちの発見こそ
予後を良くする最善の方法であり、
無症状者でのスクリーニングの重要
性をこの論文は訴えているのであ
る。

(愛知県がんセンター第1内科

小林世美 抄)